

さらば、連合赤軍の同志諸君(一九七二・三・二五ペイルートにて)
 ペイルートより愛と悲しみをこめて

重信房子(赤軍派アラブ代表)

殺戮に心から謝罪したい

いま私は、日本のたたかう人々と対話したいと思うのです。出来る限り対話せねばならないと思うのです。

日本のたたかう人々、友人たちのその対話を、一方通行の週刊誌を通じて始めなければならぬけれど、たとえそうであっても、書かないでいるより書いたほうが良いと判断した私は、整理しきれないまま書き始めています。

リアリティーを生むだろうし、そのことを確認したうえで、文章を提出したいと思うのです。

まず、赤軍派の兵士の一人として、日本の中の友人たち、朝鮮人民たち、労働者、学生、父親たち、母親たちに、心から謝罪したいと思います。革命を希求するもともと抑圧された人々に対し、激しい絶望と嘔吐を感じさせる事態を引き起こしたこと、つなぐべき手を思わず引つ込めたくなるような殺戮の結果させたという現実、心から謝罪したいと思うのです。

私はいま、赤軍派の一兵士として、殺害の執行人と、被害者の同志たちの、革命に対する責任をも、引き受けなければならぬと思います。抑圧された階級のヒューマニズムは武装闘争であり、抑圧された階級の言葉が武装闘争であることを謝罪として証明するために、不退転の決意を固めるだけです。

そして、友人たちとたたかひの中で抱き合い、出会うために、一番初めの出発点をもう一度見つめながら歩き続けるであろうことを約束します。

連合赤軍の同志諸君、殺害に責任ある同志諸君。いま同志と呼んでいる私の気持ちが変わりますか。

もちろん、赤軍派という自己の組織を媒介として、人々と対話がなされるべきであることを承知しています。

しかし無数の牟田さん、無数の坂東くんのお父さん、そして私の父親を含む友人たちへの対話を、私は必要と感じています。

心ある獄中の同士たち、友人たちは「ブル新に書いた」という単純な拒絶反応を示さないであろうことを確信しています。言葉は、たたかひの結果としてのみ、

ブルジョアジーの裁判で処刑されることを拒否し、たたかう日本の友人たち、革命の志を堅持する友人たちが、いつの日か、人民裁判において、この巨大な罪を明らかにするであろうことをともに約束しようではありませんか。仲間を殺す権利は、だれも持ち合わせてはいないし、だれも義務を負ってはいないのです。仲間である限り。

敵を数百人殺そうと償えぬ

「隊伍を整えなさい。隊伍とは仲間であります。仲間でない隊伍がうまくゆくはずがないではありませんか。」

われわれは隊伍を整えた。全軍は九一人と七二丁の銃を余すのみとなった。「多くの者が失われたが、残ったものは精鋭中の精鋭であり、自覚を持ち、立場をわきまえ、どのような困苦と欠乏にも耐えうる戦士、すなわち、もはやわちがたき「革命の志」に結ばれた一心同体の仲間のみであった」

——中国革命に関するこの文章を、無念の思いで何度思い出したことでしょう。

「隊伍を整えなさい。隊伍とは仲間であります。仲間でない隊伍がうまくゆくはずがないではありませんか。」

私たちの革命に向かう軍建設——軍の共産主義化が、敵権力との直接的な緊張関係を通してではなく、味方内部のルール、軍規という形でしか創造しえないとしたら、明らかにそれは、プロレタリアートの自由を抑圧する道具になりさがってしまいうに違いないのです。

一握りの悪しき独裁、革命の私物化に断固としたたかいを開始したのは、あの日本共産党との歴史的決別で証してきた私たち自身だったことを、いま、もう一度検証することを始めなければなりません。

赤軍派の六九年のあの苦闘の誕生の戦略論を發展させることを、もう一度始めなければなりません。軽井沢の銃撃戦によって開始された高度な実践が、共産主義軍隊の普遍性を提出していない限り、銃撃戦の日常性をつくりあげられないばかりか、切りひらかれたたかいを摘み取ってしまう側に、敵権力ばかりでなく、たかいの友人たちであるべき人々をも追いやってしまいうに違いないのです。

たとえば、牟田さんの最初の言葉が、警察の手によって塗り替えられたばかりでなく、「人質救出」直後の毎日新聞によれば、長野県警「家族対策班」の警部は

派閥争である、自らの持ち場を固めつつあることを学ばなければならぬと思うのです。

同志を殺したことについては、たとえ、数十人、数百人の敵を殺したとしても、償えるものではないことを、私たちは、知らなければなりません。

パレスチナ戦士の一人は、日本の友人たちに次のことを伝えてほしいといっています。

「敵は、力と力でぶつかり合う方法よりも、いま組織を内部から破壊させることに集中している。これは敵との組織戦であり、思想戦である。

敵は、あらゆる装置と金力をフル動員して、プロレタリアのヘゲモニーを解体しようとしている。敵は、われわれのすき間をねらっている。われわれは常に、組織内部のスパイ活動に注意を払ってきた。ことに武装闘争が全面化していない現在のわれわれパレスチナ革命がそうであるように。

プロレタリア戦線が、新たなステップに向けて必然的な組織内論争を続行するとき、われわれは常に、敵の存在を忘れてはならないのだ。いま、敵の九〇％が武力ではなく、その他の方法で發揮されようとしている。

たまたかう日本の同志諸君、敵の二四時間にわたるプロ

「お願いだから、憎めない」とか「悪い人ではない」とかいう言葉は慎んでください。あなたがそう思っている」と、私らが何のために血を流したのかわからない」

という恫喝に似た説得を繰り返してきたことは、歴然とした事実です。仲間を十数人も殺した人が自分をよく殺さなかったものだという逆の恐怖が、牟田さん、または無数の牟田さんをどんどん追いつめていくこともまた、事実なのです。

もっとも革命的で、もっともわれわれの友人であった人々ほど、失望と憎悪が強いことを知っていますか。連合赤軍の同志諸君、パレスチナのたかいう友人たちが、悲しみと抗議をこめて「敵はだれか、友だちはだれか」と問うていることを告げなければなりません。

三月一〇日、PFLP（パレスチナ解放人民戦線）の同志たちは、党内闘争の結果としてPRFLP（パレスチナ解放革命的な人民戦線）を党内から生み出してしまったのです。

しかし、左派を名乗るPRFLPとの激しい党内闘争の過程で、彼らは決して仲間に向かって発砲することなく、敵とのたかいの個別的、勝利的たかいこそ、党

レタリア組織解体への策動を忘れてはならない。断固としたプロレタリアの団結を！」

そしてあらゆる党派の友人たち、連合赤軍がもたらした問題は、日本における革命運動の真実であって、例外ではないことを認めるといふ地平から再点検しない限り、大なり小なり、革命の終焉に向かうかも知れないのです。

武装闘争の過程における党派闘争が、敵に向かう組織戦、思想戦、実践的戦闘として貫かれない限り、内ゲバという形の、味方内部の消耗戦を許してしまうに違いないと思うのです。

国際主義という名文句が実は、世界的な人民戦争の流れを同質に受け止めることなく、もっともナショナルな悪しき道德観念を個々の内部に持続させていることを、ここに来ている、常に感じざるをえなかったのは、日本語的な左翼思想の一現象ではなく、もっと根底的なことのように思われるのです。

革命のモラルを創造して

日本の父親たち、母親たち、親が子に自分より長生きしてほしいと思うことを子供としての私たちは知ってい

ます。親が子に、自分のモラルと同質のモラルで生きてほしいことも私たちは知っています。

しかし現実には、正義と不正義がある限り、国を統治する側が私たちが不正義と呼び、私たちが彼らを不正義と呼ぶ、二つの対立する「不正義」がある限り、私たちの本当のことを知ろうとする権利は、たたかいとして表現されるしかないのです。歴史の中で、新しいもの、正しいものを求めようとした人々が、ときの権力者によって、圧殺されてきたことを私たちは知っているし、歴史とは常にそうした二つの価値の闘争の歴史であったことも、また事実です。

暴徒、暴徒、暴徒……歴史の中で真実を実践しようとした人々が、常にそう呼ばれてきたことを私たちは知っています。そしてそう呼ばれることを私たちは、ちっとも恐れたりしないのです。

革命とは、ときの権力者のあらゆる現実を打倒するたかひの総過程であり、私たちのモラルとは、革命としての生活の表現です。法律を無視するか否かではなく、革命のモラルを創造するか否かなのです。

軽井沢山荘の銃撃戦場で、むすこによびかけた母親た

私の自己批判としては、日本のたかかう友人たちに、パレスチナの戦士のモラル、情念を逆流させ、あらゆる革命の利益を日本に素材として送るべきであったと考えられています。

獄中の同志たち、友人たち、あなたたちと共通の情念と、そしてたたかいへの一歩一歩を革命戦争に向けて、ともにあることを確信します。

さらば、連合赤軍の同志諸君、欠損と責任を負い、歩きはじめる多くのうちの一人として、愛をこめて決別を

ちに対し、愛を、最大の愛をこめて拒絶するという「出会いへの出発」をわかり合うときが、かならずあると思うのです。

第二次世界大戦が、そして企業の戦争が、友人たちを殺したことを悲しむのではなく、その張本人に向けて刃をかざすために、私たちはいつか出会うでしょう。

子供を殺すことを認め合っている心中という貧しい現実には悲しむのではなく、この原因をになっっている張本人に向けて銃を向けるために、私たちはいつか出会うでしょう。子供に対して責任を持つということは、自立し合うということです。二つの階級のモラルをぶつけ合うか、ともにたたかうか、とことんまで突き進むことですか。たたかう子供たちは、一人の母親ではなく、無数の母親を持っているように、私の母親ともまた、友人でありたいと思えます。

日本人民のすべてを盾にして、人質にして帝国主義戦争を開始した日本ブルジョアジーが、人質行為をなじるという奇妙で巧妙な現象を、ひっぱがすために、たたかう日本の友人たち、兄弟たち、在日朝鮮人、中国人民が、たたかいを持続、発展させることを確信しています。

告げます。そして、この決別とは、真の隊列に向けての模索であり、自分が犯した失敗として、たたかいを再度開始するという意味をこめて。

「隊伍を整えなさい。隊伍とは、仲間でありませぬ。仲間でない隊伍がうまくゆくはずがないではありませんか」

屈くならちぎれるまで手を差しのべたい。

革命に向けて、同志たち、友人たち。燃える連帯をこめて、勝利の日まで。さようなら。